令和二年度　学校文集【令和三年三月】

ひらやま　その十一

※今回は新聞掲載作品、入選作品展入賞作品です。裏表版です。

【日向市人権作品展　入賞】

「誹謗中傷をなくすために」

六年　河野　真菜実

私は、最近テレビで誹謗中傷という言葉や文字を見かけることが多くなりました。そのような被害を受けて自殺、死亡してしまう人も少なくありません。私はそんなニュースや話を聞くと、やってはいけないと分からないのかなぁ、どうしてそんなことをやってしまうのかなぁと思います。そこで、私がやってはいけないと思った理由や考えてほしいなぁと思ったことが三つあります。

一つ目はされた人が傷ついてしまうということです。やった人は軽い気持ちで書いたのかもしれないしやったのかもしれないけど、された人はとても傷ついてしまうかもしれません。やった人はそこまで人を傷つけようとしてやったことではないのかもしれないけど、一人でもその書かれたことやされたことによって傷ついたり不安な気持ちになったりしてしまった人がいたら、それは大きな犯罪だと私は思います。自分がされたらどう思うのかをしっかり考えてほしいと思います。

二つ目は、「人でもいやな気持ちになる人はいないかということです。六年生になって道徳の時間、インターネットのトラブルについて学習しました。その学習した話は、主人公が遊びに行った思い出にみんなでとってた写真をインターネットにあげて主人公は、みんな喜んでくれると思ってたのにいっしょに写真に写っていた人がいやな気持ちになってしまったことでも書かれたものを見た人が一人でもいやな気持ちになってしまった。私はこの話を読んで自分は良いと思ってやってしまする人はいないかを考えてから投こうしてほしいと思います。

三つ目はいやな気持ちになる人を減らしてうれしくなれる人を多くしたいということです。私はそのように人がいやな思いをするような悪いことではなく、「ありがとう。」「しょうがないよ。」というような言葉や人が良い気持ちになれることをインターネットにあげたり投こうしたりすることで、投こうした人も見た人もみんなが良い気持ちになれると思います。誹謗中傷は見た人がいやな気持ちになるし、やった人も暗い気持ちになり後悔する人もいるかもしれません。そしたら逆に良いことを投こうすることでみんなが良い気持ちになれると思います。

私はこのようなことを考えたり実行したりすることで、誹謗中傷によって命を落とす人や傷つく人がいなくなり、もっとインターネットを良い方に使っていけると思います。

「情報社会と人権」

六年　赤澤　礼惟

ぼくの考える人権とは、人生をすこやかにおくることができるものです。辞書を引くと、人権とは「自由や平等などの権利」とあります。たしかに、一言で言えばそうなりますが、個人情報やメディアについての関心が高まっている最近は、少しずつ人権への考え方がちがってきているのではないでしょうか。

まず、人権に対する根本的なことを考えてみました。「生まれながらにして持っている侵すことのできない永久の権利」や、「人間らしく生きる権利」のような言葉がうかんできました。そして同時に「人間らしくとは」という疑問も生まれました。社会科の学習で習ったように、言論の自由、職業選択の自由というようなことでしょうか。でもぼくはこの答えに対してあまり納得できませんでした。法律で定められている、ルールだけが人権ではない気がしたからです。

この疑問に対する答えを見つけるためにぼくは、例をあげて考えることにしました。過去に「石に泳ぐ魚事件」というものがありました。作家のAさんが、病気の知人Bさんをもとにした小説を書きました。両者の言い分はこうなっています。

Aさん・・・人には表現の自由という権利がある。出版差し止めになるのは人権侵害だ。

Bさん・・・許可なくこのような文章をかいているのは、個人の尊重がなされていない。

この裁判、最終的にBさんが勝訴となるのですが、人権とぶつかり合う事例はよくあるそうです。しかし、人権がぶつかりあうときにお互いを傷つけようとしてはいけないということです。以上のことから人権とは攻撃の手段ではなく自分の保護の手段である、という答えにたどりつくことができました。

次に、ユビキタスネットワークの整備が着々と進む現代社会で、情報コンテンツと人権の関係について考えてみました。スマホ・タブレット・パソコンなど、様々な通信機器によって多くの情報が飛び交うなか、知らず知らずの内に人権を侵されていることがあると耳にしたことがあります。こうしたネットトラブルの原因には、主にSNSなどに写真を投こうすることが介していると思います。写真の眼に写った景色から住所を特定されたり事件は知っている人も多いのではないでしょうか。個人情報の特定は違法ですが、これに関しては本人が気をつければよいというものです。ぼくがここで考えたいことは、「報道と人権」です。何かしらの事件をおこした人物が未成年でない限り、少年法が適用さ

れないため、実名で報道されることとなります。すると、それをかぎとして様々な情報がネット上で拡散されていきます。それは全てが正確なものだというわけではありません。中には事件と関係のない人まで傷つける情報だってあるでしょう。すると、それによって傷つけられた人が精神に異常をきたしたり、もしくは自殺したりと二次災害まで引きおこしてしまいます。そうすると謝った情報を発した人間が実質的な加害者となるわけですから、さらに悲惨な結果を引き起こしかねません。ここで役に立つのが人権です。プライバシーを保護することが重要視されるため、個人に関する誤った情報を流せなくなります。しかし、実際にこうした事件は起こっているので、人権は必ずしも絶対ではないというわけです。それは多くの人が人権について詳しく知らないからだと思います。

ぼくの夢は弁護士になることです。将来は人権について多くの人に知ってもらう活動をしたいと思っています。人権は人生をすこやかに楽しくするものだと伝えていきたいです。

【新聞掲載作品】

「竹うま」　一年　黒木　健太

ゆうなさんが、いま、いちばんたのしいことは、竹うまをすることです。

ゆうなさんは、はじめのったとき三十一ぽあるけたそうです。ながいのも十かいあるけるようになったそうです。いちばんながいのもちょうせんしたいそうです。

ぼくもゆうなさんの竹うまを見たいです。

「ししまい」　一年　黒木　恋音

あさひさんがいま、いちばんたのしいことは、ししまいをすることです。

人をこわがらせることがたのしいそうです。人のあたまをかむのだそうです。

わたしも、ししまいにあたまをかまれるとびっくりします。

「実せん！私のエコ活動」　四年　河野　裕介

ぼくの家の前の公園では、たびたびゴミがすてられています。時々そうじをしますが、よく日、公園を見ると、またゴミがすてられています。主に夕バコやあきかん、おかしのふくろなどが多いです。

どうしたらそのゴミをへらせるかと考えた結果、そこの公園ではよく一年生、二年生が来るので、ゴミをすてないようによびかけることにしました。

さっそくおかしを持っていた子がいたので、食べた後に、持って帰るよう言うと、ちゃんと持って帰って行きました。なのでその方法は、役に立つことが分かりました。

また、他人へのよびかけだけではなく、ぼく自身もリサイクルの協力に力を入れ、マイバックの利用もすることにしています。これらの方法を使って、今までのかんきょうを変えていけたら良いなと思っています。

「台風にそなえて」　三年　赤澤　憬

わたしは金曜日に帰ったらお父さんが、

「けい、行くよ。」

と言いました。それは、台風にそなえてもし二かいでくらすことになったらなにもしないのでそれを買いに行く所でした。わたしはお店についてびっくりしました。なぜかというと、お客さんがいっぱいいて、水のコーナーに行っても水がぜんぜんないからです。あと三けんぐらいお店に行ってもありません。

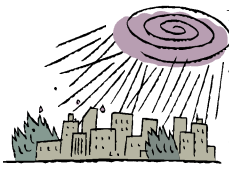
「コンビニに行ってみたら。」

そこでお母さんが電話で、

と言い、コンビニに行きました。

そしたら、わたしとお父さんは、いがいとお客さんが少なくて、水がいっぱいありました。はじめて水を五本も買って長いしょうみきげんのパンを八つ買いました。帰ったらお母さんが先に帰っていて、お母さんも台風のそなえのものをいっぱい買っていて、ふくろにぱんぱんに入れていました。まだまだそなえは続いて、まどにダンボールをはったり、ランタンやかい中電とう、それから水道がとまったら二かいのトイレの水が流せなくなるので、大きい、ペットボトルに水をいっぱい入れたり、紙コップや紙皿を用意したりして、カセットコンロもおきました。おりたたみ式テーブルとおりたたみイスも用意してマットをしきました。やりすぎと思ったけど、ここまで大きなさいがいがおこりそうなことがよく分かりました。

しょう来一人ぐらしの時こういうそなえを一人でするのは大へんだなあと思いました。



「自分を信じろ」　六年　木田　暖人

ぼくが座右の銘にしたい言葉は「自分を信じろ」だ。これは、ぼくが自信を持てないときのお父さんの言葉だ。

ぼくがこの言葉を選んだのは、みんなの前で発表するときに自信を持てないところが多いからだ。学校で発表するとき、ぼくはあまり発表しなくて先生に当てられたときは、きん張して自信が持てなくなる。発表する前はちゃんと忘れないのに、本当に発表するときはすぐに忘れてしまう。そういうところがぼくの悪いところだ。

学校から帰った後の土曜日、日曜日は毎回発表の練習をしている。でも大きな声や発表で言うことがくせになっている。ぼくの発表が終わった後はいつも、はずかしい気持ちになる。ぼくが家に帰った後、そのことをときどきお父さんに相談している。その時毎回のように「自分を信じろ」と言っている。

なのでぼくは「自分を信じろ」と心で言って、発表するときにその言葉を信じている。